２０２４年度

相愛保育園及び相愛ひめぎ保育園の保育計画立案方針

◆始めに

「　見よ、わたしはあなたと共にいる。 」

創世記 28 章 15 節

相愛保育園・相愛ひめぎ保育園では、子どもたちがそれぞれ発達段階に応じた保育の中で、与えられた力を存分に発揮できる事をあらゆる方面から検討し保育計画に反映します。

そのためには、先ず保育者同士が互いを認め合い支えあう関係であることが前提条件となります。保育者の関係性が子どもたちに多大なる影響を与えるからです。 同時に、働きやすい職場作りのために常に理想を追い求めます。 その事が、ひるがえって保育の質の向上につながると考えるからです。 この点をしっかりと念頭に置き、かつキリスト教保育の実践のために「明るい、元気な、正しい」子ども像を目指しつつ、子ども達と保護者のために祈れる姿勢を大切に保育計画の立案をします。

◆保育目標

1、 あかるい子ども

・明るい子どもは、表現が豊かな子どもです。 明るい笑顔がいつも出せる保育園であるためには、わがままが言える保育園でなければなりません。 わがままを存分言え、それをしっかりと受け止める保育姿勢をもって取り組みます。 表現が豊かとは、喜怒哀楽を素直に出せることと信じます。

2、 元気な子ども

・元気な子どもは、遊びが十分に保障されてこそ元気になれます。 天気が良い日は戸外で思いっきり遊べる時間を保障し、また散歩を日課に取組み、体力の増強も図り心身ともに元気な子どもを目指します。そして、何よりも、元気でいたいと自ら思う子どもであって欲しいと願います。

3、 正しい子ども

・正しさは、時として人を裁く事につながりかねない点をしっかりと念頭におき、保育にあたります。

正しさは「許し」から始まり、そして「許し」続ける事で完成していく事を忘れずに、常に子どもが自ら正しさを身につけていく過程を待つ姿勢を大切にします。

・・・この子ども像は、保育者が目指すのものではなく、子どもたちが自ら「あかるく・元気な・正しい」子どもになりたいという気持ちを育てていく保育の目標です。

◆全体としての確認

☆彡子どもに対して、決して「指導的」にならないよう、常に謙虚に保育にあたります。 子どもを、教え育てようと

言う視点だけで接すると、子どもの色んな姿に保育者の目が曇り偏った見方になりかねません。

例えば、落ち着きがなく、危険な行動をする子どもに対して、保育が行き届かない困った子どもとしか理解できかねない落とし穴、です。 更には、親はわが子の困った状態を知っているのか、と言った親への不満・攻撃ともなりかねないのです。

子ども達と保護者は、ともに保育を進めていく上での大切なパートナーです。 精神的には上に立っても、命がこうして守られ日々を歩ませてもらっていると言う点では、ともに歩むパートナーなのです。

保育者の側に、このパートナーシップが欠如してしまうと、相手（子どもや保護者）の気持ちは益々見えなくなります。 単に指導する側とされる側の関係になってしまいます。

保育にもっとも大切なのは、謙虚さです。「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」ﾙｶ 14:11 自分を低くする者にこそ、保育の光は射し込みます。「自分を低くして、この子供のようになる人が、天国でいちばん偉いのだ。」ﾏﾀｲ 18:4 聖書が語られるように、子どもをまんなかに、いつも謙虚に保育にあたるひとりであるよう心がけていきましょう。

◆未満児の保育計画

☆彡3歳未満児は、基本的生活習慣の基礎作りの時期。 じっくり慌てず、自分でやろうと言う意欲を支えてあげる事で、安心して取り組み、自立へと結びついていきます。 その子の頑張っている事、できる事をしっかりと見極め、また保育者同士が保育方針の統一を常に確認し合う事が大切です。 また、子ども同士の喧嘩が絶えない時期ですが、この喧嘩こそが心身の発達の栄養分となっていく時期でもあります。 保育者が喧嘩を仲裁する役に走るのでは、子どもの発達をしっかりと捉えていないのであって、子ども達の心にも不満が残るばかりです。 どうしたら仲良く遊べるか、過ごせるか、遊具などを仲良く使えるかを、子どもとともに考える姿勢が求められます。 3歳未満児の頃の保育は、これらの事を配慮しながら計画していきます。☆彡

【0歳児童】

（保育の視点）

1、保育者は子どもの気持を受け入れ、一人ひとりの要求を充たすよう努め、一人ひとりの子どもとの間に気持の通じ合いを確立させる事を目標とします。 そのためにも、愛情を持って子どもを育み育てます。

2、快適な条件作りを心がけ（ゆったりできるスペースなどの設定）、子どものやろうとする意欲を育てます。

3、保護者とよく話し合い、家庭とともに育てる関係を作ります。

（主な保育活動）

1、 生活リズムを確立し、落ち着いた温かい雰囲気の中で生活させます。

2、 身体作りに積極的に取り組みます。（哺乳、離乳、赤ちゃん体操、外気浴、予防など）

【1歳児】

（保育の視点）

1、子どもがやろうとする気持を大切にし、行動を禁止する言葉はできるだけ避け、行動を方

向づけるようにします。

2、 衣、食、住の世話をする中で、子どもに基本的な生活習慣のやり方、形を教えます。

3、一人ひとりの遊びを保障しながら、仲間とかかわって遊ぶようにします。

（主な保育活動）

1、歩くことを中心とした運動機能を促進します。

2、手と言葉による認識、概念づくりを図ります。

3、排泄を中心とした基本的習慣に取り組みます。

【2歳児】

（保育の視点）

1、一人ひとりの話をゆっくりと聴いて、答えていきます。「どっちにする？」と自分で選んで行動する事や、「自分で、自分で。」と言う意欲をきめ細やかに育てていきます。

2、規律を明確にして、規律の中で行動するよう言葉で伝え、それを待ちます。

3、保育者が中心になって集団で遊び、みんなで遊ぶ事が楽しい、みんなといることが喜びであると言う気持を育てていきます。

（主な保育活動）

1、言葉の獲得 → 豊かな会話をしていきます。

2、衣服の着脱、おはしの使用を中心とした基本的生活習慣を身につけます。

3、集団 → みんなと一緒に遊び、また固定遊具、ボール、三輪車など、全身を使った遊びを十分にしていきます。

◆3歳以上児の保育計画

☆彡3歳以上児になると、乳児期から幼児期への移行期です。 逞しさを感じる反面、幼い面も多々目に付く時期です。 そして3歳児はその最初の時期であり、月齢によって発達差が著しい時期でもあります。 この時期になると、声かけで自己をコントロールする力を確かなものにしていけます。 だからこそ、声のかけ方はその子の年齢（月齢）に応じて、ゆったりとした見通しで接することが大切です。 言葉の創造期とも言われ、間違いながら、揺れ動きながら、段々と確かな力を獲得していきます。 しかし、5歳児くらいになると、共通の目標に向って準備をし、課題に向って活動する事が喜びとなり、誇りともなる時期を迎えます。 この時期の保育計画にあたっては、こうした著しい心身の発達の特質をしっかりと踏まえ、子どもの内的成長を支える事を目指します。 この時期の子ども達は、失敗を恐れ、困難な事を避ける傾向も見られる頃です。 しかし失敗は、成長の肥やしであることを保育者が深く理解し、納得いくまで「待つ」保育姿勢が強く求められる時期なのです。 この時期だからこそ、「待つ」事をしっかりと保育方針として確認し、成長を喜び合う中でより高い課題設定を計画していきます。☆彡

【3歳児】

（保育の視点）

1、自分の意見を言える場面を設定し、仲間との協調性を育てます。

2、身の回りの事は自分でできるよう励まし、失敗しても根気よく待ちます。

3、 クラスでの役割や当番活動などの労働を喜びにかえるよう働き掛けます。

（主な保育活動）

1、言葉の「体得」 ⇒ 豊かな対話をしていきます。

2、自分の意見など気持を表現できる場面を多く設定していきます。

3、遊びの展開を保障する。 ※「ダメ！」と禁止してしまうのではなく、子ども達の発想をどうつなげていくかを常に考察していきます。

⇒ルールのある遊びなどを共に楽しみます。（例、カゴメカゴメ）

【4歳児】

（保育の視点）

1、 学童期に向け、体作りの基礎をしっかりと身につけるよう支えます。

2、 食べることへの意欲を育てていきます。（保護者との連携）

3、 協力・共同して楽しい集団活動を工夫できるよう支援します。

（主な保育活動）

1、天気の良い日はほぼ毎日散歩に出かけて体力づくりを図り、また四季を感じ共有・共感することで、仲間意識を育てていきます。

2、「食べ」、「出す」のか、具体的に（赤・黄・緑の食物グループの説明など）理解させ、食べることへの意欲へとつなげていきます。（野菜などの栽培 ⇒ 収穫）

3、動植物の世話などを通し、命の尊さや見通し（日々の観察から）を持って生活する力を培うよう支えます。

4、 手先を使った遊びを共に楽しみます。（折り紙など）

5、 くまさんタイム（＝仮称）を帰りの時間に設け、自分の思いを伝え共感してもらい、また意見を貰う体験を通し、仲間の意見に耳を傾ける力を培うよう支えていきます。

【5歳児】

（保育の視点）

1、一番大きい年長児になる事を誇りに思い、学童期への自信を深める場面を多く設定していきます。（当番や約束事の話し合いなど）

2、日常生活を見直し、社会への意識とつなげていきます。

・保育園にはどんな部屋があり、どんな使い方をしているか。

・小さな子ども達の部屋では、どんな生活、遊びをしているか。

・保育園では、どんな大人が、自分達のためにどんな仕事をしているか。

⇒ 質問や対話を通し、自分の存在を確かめます。

3、知的好奇心が旺盛になる時期

⇒ 興味が持てない子は、何が興味の中心にあるのか、どんな時に意欲的になるかを、保育者が常に援助の課題を検討していきます。

⇒ 劇遊び、読み聞かせ（続き物も取り入れ、明日への期待感を持たせ、また様々なジャンルを取り入れ誰もが興味を持てるよう工夫します。）

⇒ 発見を大切にします。（量…10までの数、集合・整理…10を色々に分ける、長さ・重さ…二つの長さを合わせて別の長さをつくる、図形…立体の概念→直方体・立方体・球、平面の概念→色々な立体の面、四角、長四角、丸、三角、 対象の概念）

4、運動機能の発達が目覚しい時であり、意図的に課題を設定します。（縄跳び、跳び箱、自転車、散歩の遠距離化、裸足での遊びなど）

（主な保育活動）

1、遊びの展開を保障するため、自分達で選択出来るよう環境設定をします。

※一斉保育ではなく、子ども達が子ども達自身で遊びを選びます。

※子ども達の手に届く所に、コーナーを設定します。（例、ブロック・コーナー）

2、表現力を伸ばすために、具体的に「見て」「触れて」「臭って」みたものを絵にしてみたり、造形につなげたりの支援をしていきます。

3、思いを形にできる支援をします。（例、お世話になった方にお手紙を書くなど）

4、発見を大切にするために、発見したものを確認し合う場を設けていきます。

※発見は、友達のすごい所などにも及ぶよう援助

5、体育遊びを目標を持って取り組ませ、互いに達成感を分かち合う場面を工夫します。

※「パフォーマンスまでに、逆上がりができるようにする。」などの具体的な目標を設定しみんなで励ます。 その際、留意する指導点として、「出来たこと」を評価する事は大切だが、「頑張っている」過程をしっかりと評価して上げ目標達成への意欲へとつなげていく。

6、年長児さんタイム（＝仮称）を帰りの時間に設け、自分の思いを伝え共感してもらい、また意見を貰う体験を通し、仲間の意見に耳を傾ける力を培い、更に、仲間との意見交換の中で、どうしたらいいのか協同して考え、創造する力を育てていきます。

【すべての園児】

1、体幹を鍛えるために、外遊びをしっかりと保障します。

・散歩はコースをしっかりと伝達し、毎週散歩に出かけます。 散歩は、保育士ひとりに、事務職ひとり（園長ふくむ）でも行けるよう配慮していく。

・足の親指を使う場面を、生活の中で増やしていきます。

例、雑巾がけ、裸足保育、綱引き、逆上がりなど

・運動遊びの日を週に１回以上行う。

2、発達支援を保護者と連携を踏まえながら進めていきます。

・発達を支援するために、「ホットコーナー」を週だより「光の子」の記事として掲載していきます。

子育て支援のための、具体的な方法を紹介していきます。

・子育て相談を、個別に行います。 また、くまぐみ（5歳児）は年に１回は就学前相談を行います。

3、行事を子どもたちが主体的に参加できる内容に常に検討していきます。

・プログラムの可視化を図ります。

・3歳児の式典参加は、見合わせます。（状況に応じて）

・礼拝は各クラスで行うことを原則としますが、異年齢構成も大事にし、合同でのお祈りの時も計画していきます。

・日常保育にリズムがつけられるよう、保護者の方に子どもと保護者のゆとりにあわせて、9時登園の協力を呼び掛けていきます。
・誕生会の在り方は子どもの様子を見ながら、常に検討していきます。
・家族グループは、お世話係、バーディづくりなどの在り方を、子どもの様子を見ながら検討していきます。 特にジェンダーフリー（性による社会的・文化的差別をなくすこと）の視点に立って、考えていきます。
・子どもを怒らずに済むよう、安心して過ごせるよう、保育環境を整えます。
また、子どもの工夫した遊びを保障します。

以上、各年齢ごとに本指針を具体化し、年保育計画 ⇒ 月保育計画 ⇒ 週保育計画 ⇒ 日保育計画と実践につなげていきます。
また、各園での5領域とは、
①「環境」⇒「教材」「遊具」など必要に応じて準備するものと、園庭や保育室、その他の保育園での生活環境を意味します。
②「健康」⇒ 健康管理の事を指し、細かくは「食事」「排泄」「睡眠」「危険性の察知」などを子ども達自身が獲得できるよう援助する事を意味します。
③「人間関係」 ⇒ 集団での関係を指し、友達関係などの様々な援助を意味します。 この際、保育者が絶対的な立場にならないよう配慮し、また保育者・職員同士が協力し合う事を通して援助していく事を意味します。
④「表現」 ⇒ 遊びを保障し、「室内」「戸外」それぞれにおける遊びの展開を指し、細かくは「体育」「美術」「音楽」に分けて援助していく事を意味します。
⑤「言葉」⇒ 「表現」「人間関係」と密接につながりのある領域を指し、言葉を自由に発する場を設けたり、耳を傾けたりする中で、自分の意志をしっかりと伝えられた喜び、聞いてもらえた喜びへとつながり、その達成感・自信が「表現」「人間関係」につながる土台となる事を意味します。

この5領域を常に念頭にしながら、子どもたちに寄り添うのではなく、寄り添われる保育者・職員を目指し、子ども達の成長を保護者と協力し合いながらこの当園の保育実践につなげていきます。 また、ジェンダーフリーの理念に基づき、性自認（SOGI）を子どもたちとともに考えていきます。（例えば、男女に分けて活動をするとか、血液型性格判断を安易に会話に出すとかは、厳に慎みます。）
秘密保持の大原則は、保育に携わる者として強く意識していきます。 また保育を離れた私生活においても、どんな時でも子どもと向き合える一人でいられるように真摯に日々邁進します。

「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を小学校接続のためにと、保育現場では求められています。
小学校に入学してから困らないためにというのが理由です。しかし、小学校に入学するための準備期間として幼児期があるわけではありません。子どもたちが、自分らしく安心して小学校に入学していけるよう、保育園では過ごさせたいと思っています。
また、子育て支援の機能を活かしていくためにも、子どもをまんなかに保護者を励まし、支える、信頼関係づくりに努めます。